

みんなで支える対馬の未来

～人口減少時代に負けない生き方を考える～

想像してみましょう、10年後の対馬を。

団塊の世代が後期高齢者に突入、限界集落の増加、つながりの希薄化…、様々な課題が見えてきます。

人口減少社会において重要となってくる「ソーシャルキャピタル」という「関係性人口」を表現した言葉があります。これは「関係性が薄い1,000人の社会より、関係性が深い100人の社会の方が地域力が高い」という考えです。

今回の広報つしまでは、対馬の財産である「つながり」を大切に、新たな地域づくりや男女がともに支えあう社会づくり、公的サポートなど様々な観点から活動している皆様の思いをご紹介します、私たちの在り方や私たちの10年後の暮らしについて考えてみたいと思います。

地域の中で



男女を超えて



自助・共助・公助

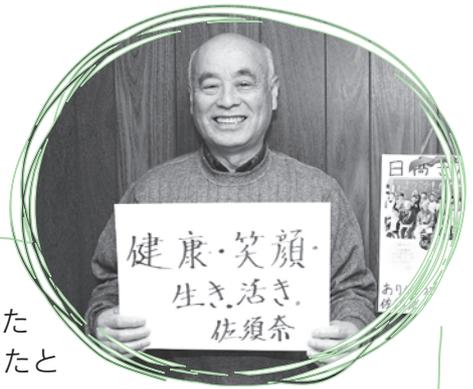


暮らしを楽しく安心に

地域おこしグループ「もやいの会佐須奈」代表 日高光博さん

最初は桜並木を作ろうと思って一人で河津桜の木を植えはじめました。地主さんたちに耕作していない田畑を貸してもらってはじめてなのですが、藤棚や遊具もおいてみんなが集まる場所にしたいと話したところ、快く賛同し土地を提供していただきました。

「もやいの会」は、佐須奈をどうかしたいという思い、人と人を結びたいという思いから結成しました。年齢は問わず、無理をせずできることをやります。現在、40代から80代までメンバーは58人。市や県の事業に協力すること、区や地域が望むことをやるのが活動方針です。国道道や港の掃除の他、対馬にしかない蝶「ツシマウラボシシジミ」の保護活動にも取り組んでいます。また社会福祉協議会のふれあい学習や公民館講座とも協力して、新聞ちぎり絵・草木染・オカリナ演奏会なども開催しましたし、学校に呼んでいただくことも増えました。何かをやりたいと思った時、自分の地域だけで予算が足りなければ、隣町と一緒にイベントを企画することも。プラス思考で事を動かせば、何より心強い「人の循環」が生まれます。人と人の出会いが一番大事ですね。10年後を考えた時、私たちは、このつながりを活かして地域包括的な高齢者の見守り活動を広げていきたいと考えます。共に助け合い、支え合う町づくりを、ここ佐須奈から広く発信していきます。



次世代に食文化を伝える共通の思いが 田舎暮らしを豊かに

久根田舎女性グループ 初村八重美さん 横松幸代さん
齊藤登美恵さん 初村松代さん 三山富美子さん



きっかけは33年前、当時の行政担当者から、神戸のそごうデパートで対州そばの実演販売をお願いされたこと。お客さんがお金を払って喜んで食べてくださる姿を目の当たりにし、思い立ちました。家族は大反対しましたが「やってみらんとわからん」といって、半ば強引にはじめました。当時は、加工品の販売所もありませんでしたから、自前の農産物を餅やそばに加工しては、個人の家々を回り行商しました（初村松代さん）。

大先輩である松代さんのノウハウを参考に、その後、同じ地区で3人が許可を取り、4組の加工販売で今に至ります。餅やそばに加え、つけものや、イースト饅頭・豆腐・こんにやくなどを作って販売しています。その一人、齊藤さんはご主人と民泊もはじめました。こんな小さな地区で同業者が4組なんて成り立つのだろうかと思いましたが、それぞれが販売先を工夫したり、交代で市場に出したりするなど上手にすみ分けています。また、集まっては和やかに過ごし、いい意味で切磋琢磨しているのが長続きの秘訣ではないでしょうか。家族の理解もあり、休日は旦那さんと作業を分担したり、息子さんやお嫁さん、お孫さんまで総出で販売を手伝うなど支え合いが、みなさんの向上心とやる気にも繋がっています。与えられるものを待つのではなく、チャレンジする気持ちがさらに、皆さんの活動の場を広げています（横松幸代さん）。

「久根田舎の新そばを食べていただくイベントを企画したいとよね」「私も民泊に興味があるよ」「豆腐づくりを若者に伝授したいね」など、久根田舎地区が誇る農産物を武器に、消費者に喜ばれながら、久根田舎の食文化を次世代に伝えるのが共通の夢です。

佐賀地区の多彩な活動の秘訣は、 地域のルールで人を照らす

区長の武田裕嗣さん(写真右)と世話人の双須軍治さん



平成26年6月に「佐賀地区の10年後を考えるアンケート」を全住民に実施し、その思いを出来ることから形にしていくために「佐賀未来の日」という座談会をスタートさせました。毎月11日の開催日には、誰でも自由に行きたい時だけ参加します。また、地域広報紙「小姓島通信」を発行し、まもなく30号を迎えます。さらに回覧した通信の裏面には、見た人からの気づきや新たな要望が寄せられます。

ある中学生が「私の家にイノシシが来るのでなんとかしてほしい」と声をあげました。すぐに「やっつけ隊」を結成し、女性2人を含む10人が狩猟免許を取り、箱罠を設置したり監視操作システムを導入し、住民による捕獲作戦を継続中です。10年途絶えていた「亥の子」も復活し、12月の第1土曜日を亥の子の日と決め、子どもみんなが参加できるように佐賀ルールで行っています。「佐賀朝市」も実現し、気軽に地元の魚や加工品を買い物にいける場ができ、開催の度に活気づいています。夏休み子ども寺子屋は、住民が持つネットワークを駆使してあらゆるジャンルの専門家を招き、子ども達の交流ができました。医師不在となっていた歯科診療所は、住民の声が実を結び、1年前から週3回開院しています。高齢者の見守りや健康づくりにも力をいれています。まだまだ地域全体を巻き込むとまではいきませんが、まずは住民が声を上げ「佐賀に合ったやり方」をモットーにできることから取り組んでいます。計画は作るけれど、それはどんどん変更していけばいいし、声を聴いて、行動して、反省する繰り返しの中で、楽しく未来を考えていければ。できる人ができる時にやるというスタンスも大事ですね。自助、共助が強いコミュニティづくり、そこに行政の力(公助)を少し借りながら、10年後に向けて、若者が残りたいと思える魅力的な地域づくりをやっていきます。

10年後の対馬に福祉は欠かせないテーマ

対馬市社会福祉協議会(社協)

井上優子さん 龍井久美さん 斉藤貴紀さん



障がいがある方も高齢者もひとり親家庭の方も、そして子ども達も、誰もが安心して暮らしながら、地域社会に参加するための機会を提供する。それが社協の役割です。近年は、高齢者や障がいの者の介護のことだけでなく、災害発生時のボランティアセンターなど役割も多様化しており、社協は様々な地域福祉活動の取りまとめ役ともいえます。10年後の対馬を考えれば、過疎高齢化のなか、一人暮らしのお年寄りがさらに増えるのは避けられないと思いますが、自分らしく生きる社会を持続するため、社協では「対馬市地域福祉活動計画」を作成。個人や家庭で出来ること(=自助)。地域の人が集まり一緒に考え行動すること(=共助)。そして行政の取り組み(=公助)の連携を実施計画に盛り込んでいます。地域の担い手が減る中、皆さんに浸透してきた社協のボランティアセンター(人材バンク)による地域活動支援は期待を寄せる事業の一つです。

私たち社協は、公助を担う立場として、住民一人ひとりが主役になるための気づきを提供していきます。「幸せ」って形になりにくいものなので、一言では難しいのですが、色んな事業を展開したり、地域のつながりが切れないしかけを展開し、社協に求められている信頼や安心感に応えていきたいと考えています。

地域の中から誰一人漏れることがないように…。

対馬をもっと輝かせる 4つのキーワードで社会を支えよう

長崎県男女共同参画アドバイザー
対馬市男女共同参画推進懇話会会長 豊田涼子さん



私たちは、男女が個性を発揮し、共に責任を担う社会の実現を目指して活動しています。若い頃、こんなことがありました。勤めていた職場で、女性が出勤するまで男性はお茶を入れずに待っているのです。もちろんお湯も沸かさない…。「早く来た人がやればいいのではないのですか?」と意見しました。

そんな中、以前に比べると対馬でも意識が変わっているのを感じます。先日対馬市が行ったアンケートでも「食料品の買い物は主に夫」が49パーセントだったんです。共働き世帯や高齢者世帯が増え、男性もせざるを得ないというか、男女が支え合うのが当たり前前の時代になりつつあります。私がずっと言い続けていることがあります。それは、みんな生まれたその時から人権があるということ。一般的に親は、女の子にはピンクの洋服、男の子には青の洋服を着せようとしています。ランドセルの色もそうですね。その始まりが「男性とは」「女性とは」の先入観に繋がってしまうのではないのでしょうか?子どもは親の所有物ではありません。一人ひとり人格があり、すべての人に自分らしく生きる権利があります。見方を少し変えることで家庭も、地域も、職場も、学校も変わってくるはずですよ。

10年後の対馬を考えた時、私の一番の願いは、男女共同参画社会実現の4つのキーワードである「認めあい」「活かしあい」「分かちあい」「語りあい」でつながる社会です。男性、女性の意識を変え、支え合うことは、女性の自立や、地域の活性化を生み出し、心豊かな暮らしに繋がるのではないのでしょうか?

家庭や学校における不思議な「決めつけ」に疑問

美津島町少年の主張大会で男女差別をテーマに発表

田口瑠梨さん(大船越中学校1年生)と矢川豊彦校長



小学校の5・6年生頃から、家の中で「男の子だから、女の子だから」という決めつけがあることを不思議に思い始めました。「女の子だから食べ方や話し方をきちんとしなさい。女の子だから手伝いをしなさい」とか友達も同じように言われていることを知り、はじめは消極的でしたが、この疑問を周りに伝えた方が良いという気持ちに変わっていきました。職業を自由に選べる社会、男女関係なく、自分の好きな仕事ができる社会にしたいから。発表後、家族からの言葉かけが今までと少し変わりました。

東京都の小池百合子知事は憧れの人です。小池知事のように、批判されても、自分の意見を主張する姿に勇気をもらいます。男性と女性が共に輝く対馬になればいいな。私の将来の夢は「シェフ」です。女性が少ない職業と言われますが、夢に向かって頑張ります。

校長先生から

いまだに社会に残っている男女の差別に関わることをテーマに選んだことが素晴らしいと思いますし、一番身近な家庭の事を鋭い視点で描いています。校内発表でも他の生徒たちの共感を呼び、美津島大会への代表に選ばれ、私たち教師にも気づきをくれました。学校内でも人権平和教育を進めている中で、田口さんがこのような作文を書いたことが嬉しいですね。生徒には偏見を持たず真実を見つめる目を持ち、相手の立場を思いやる想像力のある人になってほしいと願います。

対馬に暮らす私たちの在り方とは…

身の回り「つながり」、それぞれの個性や特性を「認めあい」そして「支えあう」

できる人が できる時に できることを まずはその一歩から…